

# 小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

2

Vol.45 No.2 FEBRUARY

2022

## 今さら聞けない 看護の根拠

子どもによくある  
病気と基本ケア

連載

もっと知ろう！障害がある子どもと  
家族のくらしの支え方  
学校生活における支援

児童養護施設の看護実践  
退所に向けての支援

へるす出版



# 心が歌えば、世界が揺れる ♪♪♪

佐藤聰美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

## 第10回 非合理的な不安を抱える力

2000年に入ってから、ITの医療参入が顕著らしい。米国では額に貼り付ける小さなEEG(脳波計)もすでに広がっているようだ。読者の皆さんの中にも、健康管理のためにアップルウォッチを使用している人がおられるだろう。ウェアラブルの測定機器が広まり、欧洲のサッカー選手のスポーツウェアに心拍数を察知する機器が埋め込まれていたりもする。早期に健康被害を検出し、休養などの対策を取るためである。例えばランニング選手のシューズが、「もっとかかとを上げたほうが良い」などと走行中にアドバイスをしてくれたりもする。すなわち、自分では気づけない欠点を気づかせてくれるのである。

一般に、自分で気づかない限り行動修正はできないという行動主義は、自分の限界を人工知能に教えてもらうことで乗り越えようとする。身体のより良い動かし方やケアに人工知能(AI)が応じるのである。いずれ小児がんの子どもたちのセルフケアも、薬の飲み忘れ防止アラームや、歩きすぎワーニングなど、ウェアラブル機器が補助してくれるのかもしれない。

その一方で、絶対にAIに無理なのが看護ではないだろうか。人にケアをしてもらっている、その人間関係自体が回復を促す面もある。特に、入院中の子どもたちは看護師が体を拭いてくれる清拭や、短時間でも

入浴させてもらえることを楽しみにしている。朝起きて、ベッドの上で過ごす一日でも、体を拭いてもらい、すっきりして着替える。体力がなくなっている子どもでも、特に背中を拭いてもらえると快適なように見える。銭湯で「背中を流す」という言葉を今の子どもは知らないかもしねないが、誰かが背中を洗ってくれたり、なでてくれたりする感覚は、ひとりではない安心感をもたらしてくれる。

あるとき、病児のきょうだいが喋らなくなった。母親は同胞が病気になったことによるショックや傷つきだと心配した。でも、本人によくよく話を聞いてみると、外泊のために家に戻ってきた病児と別れるときに「バイバイ」というと、それっきり会えなくなるような気がして、同胞を死なせるのではないかという恐怖心が変に沸き起こってきたようだった。別れを口にすると現実になるような気がして、話せなくなったのだ。だからと言って、実際には大騒ぎするようなことは何も起きず、学校ではその子は普通に過ごしていた。それを抱えながら暮らしているうちに、忙しくなり、それはいつの間にか消えていった。その子は自分で非合理的な不安であることに気づいていたものと思われる。こういう非論理的な恐れは、誰でも経験しうる。しかし、AIには到底感知できないことであろう。

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。小児がんの子どもと家族を支えるエゴノキクラブを主宰。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。